ヴァチカン便り（13）

法王、スリランカとフィリピンへ

大ローマ布教所長
山口　英雄　*Hideo Yamaguchi*

マニラのミサに700万人参集

現法王フランチェスコは、1月12日より19日まで、スリランカとフィリピンへ司牧の旅に出かけた。13日にスリランカのコロンボに到着し、現地の司祭、各宗教のリーダー、そして信者たちと面会した。法王がスリランカを訪問するのは歴史上初めてであった。

そして、1月15日に、法王はフィリピンに渡った。そこからすぐにレイテ島のタクロバンに移動、1月17日のミサのために現地の空港に到着した法王は、折から接近していた台風の豪雨に直面し、飛行機のタラップから下りるやいなやびっしょり濡れてしまった。そのため、一般信者に配られていた黄色がかった透明のプラスティック製雨ガッパが着せられた。低い雲に覆われ、辺り一面は灰色に包まれたが、法王や参集した信者が着ていた雨ガッパの黄色が地表を覆い尽くした。法王は雨ガッパを脱ぐ事なくミサを執行。法王が雨ガッパを着たままミサを行ったのは初めてのことであった。

法王のミサに出席するために30万人の信者が集った。歩くことには慣れているにしても、多くの人は嵐の中を、前の日から歩いてやって来た。ここ、タクロバンは2013年11月8日の朝、台風ヨーランダに見舞われ、7千人の犠牲者を出したところだ。この町に住んでいるのはほとんどが漁師で、普段、訪れる人は滅多にいない。町のある婦人は訪れた記者をとらえて、この町に来てくれてありがとうと感激していたという。

法王は英語の原稿を失ってしまい、急遽スペイン語で説教を始めた。それゆえ、側にいた神父が英語に訳した。「ローマでこの地の悲劇を見たとき、この地に来なければならないと思った。そしてその日のうちに、この土地に来て、皆と共に過ごしたいと決心した。少し遅くなったが、ともあれ、今ここに居る。」そして、神の憐れみ、神による痛みの取りなしについて話し、さらに「イエスは主であると共に人々を失望させないことを、貴方がたに話すために私はここに居る。私たちはマリアに抱かれたキリストのようなものだ。苦しい時、辛い時には“おかあさん”と叫ぶだろう。主は我々の希望を奪いはしない」と述べた。このミサに参列者の中には、2,700足の靴を持っていたことで知られるイメルダ・マルコスも確認されている。

貧しき者の味方である法王のために、貧しき者の集団が集った。果てることのないマニラの民衆は「貧」がどういうものか直接法王に話した。“南から来た”法王は「南」の言葉を聞き、肌で感じたようである。

アジアで最大のキリスト教国であるフィリピンの神父たちは、2015年を「貧者の年」と定義している。この司牧の旅でみられた慈悲と哀れみは、法王の“苦しむ人間性”をあらわにしている。マニラのタグリ枢機卿は、「貧者たちの存在価値を見出し、社会を改革し、被造物を気遣い、尊厳ある生へ導くためにここに来たのだ。このようなローマ法王の光景は、明日も、未来永劫に続く、法王の南への讃歌となるだろう」と述べている。

1995年にヨハネ・パオロ2世がマニラを訪問した6月15日に、ローマ法王を一目見ようと集った人の数は数百万人に達した。しかし、今回参集した信者の数は、一説によれば700万人にものぼると言われている。この数字は、今までのキリスト教の野外ミサにおける参列者の数を大幅に上回っている。法王は「アジアは教会の未来」であり、「フィリピン人はアジアのカソリックの伝道者である」と断言した。

今回の法王のフィリピン訪問のさらなる目的は、路上で生活し、教会の慈善事業で救かった12歳の子供グリゼッレに会うことであった。花柄の白い衣装を纏っていたその娘は、法王に次のように尋ねた。「なぜ子供が苦しむの？」法王は目に涙をためて聞いていた。そして、その子を抱きしめ、額に接吻した。この子は何も言えず、法王の衣装にすがって泣き崩れていた。法王は「皆よ、泣く事も習得しよう」と訴えた。「今日、クリゼッレが泣いたように、空腹の子供、麻薬漬けの子供、家なき子、捨てられた子、強姦された子、社会からはじき出された子供を見たら、我々は泣き、たすけ上げるよう努力しよう。キリストも福音の中で泣いているのだ。泣けないキリスト教徒は良きキリスト教徒ではない」。

法王はスリランカからマニラに向かう飛行機の中で、各国の記者団の質問に応じていた。「神の名において人を殺すのは言語道断だ」、「他の信仰を揶揄したり、侮ったりすべきではない」、「各宗教はそれぞれ尊厳性を持っている。各宗教は生命を、人間性を尊重している。それをとやかく言うべきではない。表現の自由は尊重されるが、それにもやはり限度はある」などと述べている。

法王はある記者から、法王自身の安全性と信者の安全性について問われて、次のように答えた。

> 答える一番いい方法は、いつも温和である事だ。パンのように温和であり、謙虚であれ。私はここに居る。しかしそのことに気づかない人も居る。私のことについては信者が考えてくれる。ヴァチカンの安全性については衛兵長のジャーニとも話している。私は怖いかって？　私には一つの欠点が有る。それは何も気にならないことだ。私は主に問いただしたことがある。私には何も起きないように恩寵を下されと。というのは、私は痛みに耐えられないからだ。私は非常に臆病だ。しかし、自分で自分の治療は出来る。安全への配慮は、注意深くなければならない。伝道のために尊き命を落としている人もいる。「神風」の犠牲者はたくさんいる。「神風」の犠牲者はただ単に東洋だけではない。

また、「フィリピンでは、台風で被害を受けたところを訪問されるようですが、法王の次の回勅では、被造物の保護ということではどう考えていらっしゃいますか」との問いには、このように答えている。

> ある農夫は次のように語っている。神はいつも赦してくれる。人間は時々赦すこともあるが、自然が赦してくれることは絶対にない。人間は行き過ぎた。その最たる出来事が「広島」なのだ。次の回勅については、ただいま、準備中だ。３度まで草稿をつくったが、来る６月中には出来るだろう。気候に関するペルー会議では、うまくいかなかったようだが、次のパリでの会議では、勇気を持って相談を押し進め、良き結論が出ることだろう。